

神の子の祝福

「ヨハネによる福音書」1章9～13節を朗読。

12節「しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」。

9節に、「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた」とあります。これはクリスマスの出来事と合わせて覚えられる御言葉ですが、ここに言われている「まことの光」とは何か。これは神様ご自身の事です。神様は光でいらっしゃる。神様のご性質は光であると、「ヨハネの第一の手紙」には記されています。言うならば、何一つ曇りも影も一切ない。純白と言いますか、透き通ったと言いますか、そういう光です。その光が私たちの所にきた。なぜなら、私たちはその光を失っていたからだということが前提にあります。すべての人が暗黒の地、暗やみの中にいたと、「イザヤ書」に記されています。今でもそうだと思います。この世は、闇の世、終りの世です。事実、昨年一カ年の事を振り返っても、何一つ心温まる、望みを与える、平安を与える、あるいは慰めとなるべき事があつたでしょうか。次から次と、不安と心配、怒りと憤りを覚えるような事態や事が次々と続いています。神も仏もあつたものかと、まさにこんな世の中に誰がしたかと言われたら、言葉がないのです。それはまさに人の悪の結果です。神様はどうしてこんな人を造ったのだろうかと思わざるを得ない。神様はどうしてこんなひどい、悪魔のような人を造ったのだろうか。極悪非道な

わざが行われる。ウクライナとロシアの戦争が始まり、かれこれ一年近く経ちます。今も激しい戦いが続いています。最近、闘いの現場をライブで配信する動画がありますが、そういうものを見ると、非常に悲惨な光景にやりきれない思いがします。目の前を歩いている兵士が、あるいは、走っていく戦闘車が、爆発と共に一瞬にして瓦礫となって命が絶たれるのです。狙撃兵が狙っていた弾が当たると、血が噴き出し倒れる。そのような光景を見ると、胸が潰されるようです。もっとかわいそうなのは、死んだ兵士に関わる家族がいます。愛する人がいるでしょうか。親がいるでしょうか。またその周囲に、たくさんの人々が彼の死を聞いて、悲しまざるを得ない。それは生涯続いていくに違いない。それは私たちが経験したことです。第二次世界大戦で、私たちの家族の多くが亡くなりました。私の叔父もそうです。赤紙という召集令状をもらって、家族と別れて、出て行ったのです。ビルマの方の戦線に送られました。今のシンガポールの辺りに来た時に、叔父は発病し、結核を患いました。それが悪化して、その地で死んでしまいました。戦後の混乱から今に至るまで、その事は尾をひいていきます。今もって、癒されない思いを多くの人が心に持っています。命を絶たれていく人たち、それはウクライナにせよ、ロシアにせよ、同じです。やがてそれは彼らの大きな痛みとなり、悲しみとなり、これからいつまでも続いていくでしょう。まさに、今の私たちの世は、暗黒の地に住む者たち、暗やみに歩んでいる者と、預言者イザヤが

語ったように、まさに光がない。望みがない。その闇を取り除くために、光なるお方、御子イエス・キリストが、この世に来て下さったのだと、この御言葉の語ることに他なりません。

「**すべての人を照すまことの光**」。本来ならば、その光と共にあるべき私たちです。創世のはじめ、人が造られた時、神様はすべてのものを造られ、その最後に人を造られたとあります。皆さんもよく聞いている事です。そして、人を造られた時、神様がなさったのは、ご自分のかたちにかたどり、ご自身の息を吹き入れて、被造物たる人を生きる者として下さいました。他の被造物、動物にせよ、植物にせよ、森羅万象、どれ一つとって、神様はそういうことはなさっていない。すべての造られたものの中で、ただ私たち人間だけが、神のかたちにかたどられ、神の性質を受け継ぐ者として、光に生きる者として造られたのです。神と共にあるとは、神様のご性質の中に私たちも共に生きる者となる。言うならば、神様と親子と言いますか、兄弟と言いますか、血を分けた、親しい者として、人を造られた。ところが、人が光を失ってしまう。誰によってか。自分たちの罪のゆえです。罪とは何か。それは私たちを神様から引き離す力です。神様を見えないようにしてしまう力です。人が造られた者でありながら、その身分を忘れて、あたかも自分が創造者、造り主であるかのように思い違いをする。これが罪です。世間で言う罪とは、物を盗んだり、人を殺したり、ケガをさせたり、犯罪を犯すことが罪だ

と思われませんが、それよりも根本的な罪がある。それが原罪と言われている。神様がおられるのに、神様を認めようとしない、信じようとしない。そして己を神とする。自分を神とする。これが罪の根源です。「創世記」を読みますと、人は神様から造られ、エデンの園に神と共に生きる者とされました。しかし、罪を犯した結果、彼らはそこにとどまることができなくなり、失われたものとなったのです。しかし、神様は失われてしまった、出来損ないは要らないと捨てたのではないのです。なんと神様は、ご自分に対して罪を犯した、反抗し、神様を拒んで、去って行った人を惜しんで下さった。そのままにしておくことができなかつたのです。なぜか。それは愛していたからです。私たちを神様は大切な存在として、愛して下さいました。「ヨハネの第一の手紙」を読んでおきましょう。

「**ヨハネの第一の手紙**」 4 章 8~10 節を朗読。

9 節に「**ひとり子を世につかわし**」とあります。まさにご自身の大切なひとり子であるイエス様をこの世に遣わして下さいました。私たちと同じ人のかたちをとり、肉体をもってこの世に生きる者として遣わして下さいました。それは何のためか。私たちすべての者の罪を、この御子に負わせて、あの十字架にすべてを処分するためです。私たちは神様に罪を犯した結果、神様の前に行くことができない。光を失ってしまった。そして闇の力に支配された私たちを取り戻すために、ご自分の尊

いひとり子をこの世に遣わして下さったのです。どうしてそんなことを、と思います。それは私たちが愛したからだと言っています。10 節に「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある」。ひとり子を私たちの罪のために、十字架につけることによって、私たちすべての人の罪を取り除いて下さった。もうあなたは罪を取り除かれましたと宣言されたのが、十字架です。イエス様がこの者の罪を赦して下さった。これはなんと大きなご愛であるかと思えます。そしてその証しとして、罪を赦されたのみならず、その罪を赦された者に、新しい命として、力として、御子を遣わされた。そのよみがえりの主が、私たちと共にいるために、内に宿るものとなって下さった。10 節に、「わたしたちが神を愛したのではなく」、私たちは神様を知らず、神様に対して、まことに不義理を尽くすような、罪を犯すような者です。しかし、神様の方が、一方的に、私たちが愛して下さった。そして代償となって、贖いをなし遂げて下さった。そのためのひとり子を世に遣わされた。ここに愛がある。まさにこれこそが愛なのです。人は愛と言うと、物をもったり、頭をなでてもらったり、「私はあなたを愛しているよ」と何十篇も言えればいいかのように思います。けれども、神様の愛はそれとは到底比較にならない。命懸けです。いや、命以上に、神様は私たちが愛して下さったのです。そして、私たちにご自身の御子を遣わされた。こ

の御子を遣わされた意味は、あのベツレヘムの馬小屋に、人となり給うた御子イエス様であると同時に、よみがえったイエス様が、十字架の処罰を受けて、息絶えて下さいました。命を捨てて下さった。そしてその後、墓に葬られましたが、三日目の朝早くによみがえられました。まさに、これが神様の私たちに与えて下さった、大きな賜物です。恵みです。なぜか。私たちが罪を赦されただけでなく、私たちが神様と共に生きる者として下さったのです。もし私たちの身代わりとして、イエス様が死んで罪を赦されただけでおしまいならば、確かに、罪を赦されたことに感謝するかもしれませんが。しかし、次にまた罪を犯します。また、同じことを繰り返します。それは際限がありません。これは私たちが経験することです。何度、私たちは、「もうやりません」と繰り返すことか。元旦になると、この一年はこうしよう、ああしようと期待します。もう少し痩せようとか、この本を読もう、日記をつけようなどと決心する。ところが、三日坊主でしょう。「主によって罪を赦されました」。「ああ、ありがたい」。でもすぐに忘れる。そして同じことを繰り返す。どうやったら、私たちが罪を離れて、私を愛して下さる神様と共に生きることができるだろうか。それは自分ではできないのです。自分の力でそれを全うすることはできません。だから、神様はご自分のひとり子を、罪のゆえに罰して墓に葬りましたが、死からよみがえらせて下さった。死に打ち勝つ力を、今度は私たち一人一人に注いで下さる。御子を信じる者。イエス様が私の罪のゆ

えに十字架に命を絶たれて下さった。そして今は、よみがえって、私と共にいて下さる。これが救いです。

ですから、もう一度初めに戻ります。「ヨハネによる福音書」1章12節に、「しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」。自分を振り返ってみて、まことに罪深い者であること、これは決して否定できません。人の前に繕うことができ、あの人はできた人、聖人君子のような人、仏さんのような人だと言われたとしても、罪がなくなるわけではない。たとえ、外側がどうであろうと、心の中を主は見えておられる。神様はあなたの心を知っておられる。イエス様は、私たちの悪は外側にあるのではなく、内側にある。それが心から出てくるから罪を犯す。いろいろな事をしてしまう。だから、私たちの一番の中心、たましいの中心に、イエス様に座っていただく。これがここに言われている、その名を信じた人々です。イエス様は私の救い主。私の罪を贖われた方ですと信じて、そのイエス様はどこにいらっしゃるのか。今、私と共にいますと信じることです。私のために、罪を贖って、命まで捨てて下さったイエス様は、それで終りではなく、今、私のうちに宿って下さった。これはパウロが「ガラテヤ人への手紙」に書いた通りです。「我、キリストと共に十字架につけられた。もはや、我生くるにあらず」。もう私が生きているのではない。「キリストわがうちに在りて、生くるなり」。イエス様が、キリストが、救い主が、私

のうちに生きておられます。キリストが共にいて下さる。どうぞ、今、そうなればいと憧れるものではなく、信じることです。12節に、「その名を信じた人々」とありますね。名を信じるとは、イエス・キリスト、言うならば、彼は救い主、私を永遠の滅びから救い出して下さったお方です。そしてそのお方は、どこにおられるのか。今、私と共におられますと信じることです。その人に、神の子となる力を与える。神の子供となる。言い換えると、あの創世のはじめ、人が造られ、神のかたちにかたどられ、命の息を与えられ、神と親子のような関係、家族になっていく。その力。私たちの内に、今、イエス様はよみがえって、共にいて下さる。今年は何よりも常にこのことを自覚し、覚えておきたいと思います。事あるごとに、今、ここに主がおられる。イエス様がここにいて下さる。そのことを深く信じていきたい。そして主が私と共におられるということだけでなく、その主は私たちにはっきりと「この道を行くべし」、「そこはやめるべき」「こうすべき」と、一つ一つ教えて下さる方です。なぜなら、私たちが神様の家族にふさわしい子供になり切るためです。神様は私たちを救い出して下さって、よみがえられたイエス様を私たちの内に宿して下さった。今、神様の力は内に宿っている。その事を御霊が宿るとも言います。よみがえって下さったイエス様が私の内に宿って下さった。そして、神様の家族にふさわしい者へと造り変えて下さる。これが私たちの今の信仰生活です。イエス様の救いにあずかって、この地上の旅路を生きる。

その生涯は何のためか。私たちが内側も、外側も、すべてが造り変えられていくことです。なんのために。神の性質にまで、神様と同じ家族になるのです。

「コリント人への第二の手紙」5章16～17節を朗読。

17節に、「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である」と。どんな人であっても、キリストにある。言い換えると、キリストと共に生きる者となる。キリストと一つになるということです。私たちがキリストと共に歩んで行こうとする時、新しく造られた者です。御霊は私たちの内に宿って下さる。「ローマ人への手紙」には、「アバ、父よ」と呼ぶ霊を私たちに与えたとあります。私たちの内に、神様は、神の子供にふさわしい、性情性格になることができるように、神様の力を注いで下さる。だから、私たちが救いにあずかったのは何のためか。神の性質にあずかる、神の家族になる、神の子となるために救いにあずかったのです。神様は私たちをご自分の子供にしようとしておられる。だから、イエス様をよみがえらせて、私たちの内に宿るものとして下さった。それによって、私たちをきよめて、神の性質にまで変えてくださる。神様が私たちに求められる標準は非常に高い。この位できればいいというのではなく、私たちが神様に等しくなるまでは。

親子でもそうです。子供は親に似ると言います。お子さんを見ていると、「これ

はお父さんに似ているね」となる。家に来る子供たちを見ていると、そう思います。「あのしゃべり方はお父さんにそっくり」「あのしぐさはお母さん」と、まるで瓜二つのように見える時があります。神の家族であるなら、皆さんのうちに神様の性質が見えなければならぬ。見ると、「この人は神様だよ」と。そう言われたい。でも、今はそこまでないかもしれない。「私はだめ」だと思ふ。でも、神様がして下さると言うのです。これは約束です。大切なのは、私たちが「そうですか、じゃあ、お願いします」と、心を開いて、「イエス様、私を造り変えて下さい」。私の思うところ、考えるところ、ことごとく、それら一切を、神様の性質に似るものに造り変えていただく。だから、「ヘブル人への手紙」を開きましょう。

「ヘブル人への手紙」12章5～7節を朗読。

ここに勧めの言葉として、5節に「わたしの子よ、主の訓練を軽んじてはいけません。主に責められるとき、弱り果ててはならない」と。神様は私たちをご自分の子として、それにふさわしい者に、何とか仕立てあげたいのです。以前一人の子供が来ていました。私の同級生の一人でもあったのですが、家庭が崩壊していて、その頃としては珍しい事でした。それで、いろいろな悪さをするのです。少年院に出たり入ったりしていました。それがどういうわけか、私と気が合うようで、家に遊びに来る。でも、どうも生活が乱れていますから、汚れている。あまり風呂

にも入っていない。着るものも着替えのないような状態。もちろん、その頃は、世間全般がそのような状態でしたが、あまりにも汚い。それで父や母がその子が来ると、風呂に入らせる。そして私たちが着ていた古着を、それでも彼が着ているよりはいいものでしたが、着替えさせる。そして家に数日、おいてやる。そのうち、役所の方から施設に預けることになるのです。その頃は余裕のない時代ですが、父も母も、その子のために、私たちの持っているものを集めては持たせてやる。それが悔しくて、嫌で、仕方がなかった。今思うと、神様に申し訳なかったと思いますが、やっぱり関わり合うと、その子がみすばらしいままではやれない。父も母も、自分の子供たちを見て、その子だけを放っておくわけにはいかない。なんとか整えてやりたい。上等な服を着せるわけにはいかないが、人並みにとは思ったのです。神様も私たちが罪を犯し、神を忘れてしまって、身勝手な罪のかたまりです。様々な罪の結果が充満している。イエス様もそうおっしゃっています。心は塗りたくった墓のようなものだと言っています。外側は美しくても、内には死臭のただよう心です。

「ガラテヤの人への手紙」に、御霊の実は愛、喜び、平和、寛容、慈愛、忠実、柔和、自制であると言われます。しかし、そういう御霊のご性質以上に、私たちには肉の力、人を憎んだり、自分を誇ってみたり、人をけなしたり、私たちの心はひと時として休む時なく、思いと心は散々に荒れ果てます。神の子なら、どん

な顔になるかしら。鏡を見ても分かりません。私たちの見えない心がキリストの姿、性質にまで変えられていく。これが私たちが救いにあずかった目的です。救われてもなおいろいろな悩みに遭う。人とのトラブルに遭ったり、金銭的な問題に遭ったり、学校での教育上の問題に遭ったり、戦争もありましょう。いろいろな悪がはびこっています。そういう中で、神様の性質にあずかる者として、神様は私たちに訓練して下さい。それが今読みました 12 章ですね。5 節に、「わたしの子よ、主の訓練を軽んじてはならない。主に責められるとき、弱り果ててはならない」。なぜなら、神様はご自分の子供にしようとするのですから、それにふさわしい者となってほしい。それは当然願うことです。きちんとなってから、神様の所へ帰って来いと言っているのではない。神の子としたから、親としての責任がある。だから、帰ってきなさいと招いて下さるのです。「いや、神様の所へ帰るのであれば、もうちょっとましな格好で」。何か手土産でも持って帰らなければいけないのか。何にも要らないのです。自らの罪を認めて、「主よ、何にもできない者です。思う事、願う事、神様を悲しませることが多く、神様のみこころにそむくような者でしかない」。「主よ、あわれんで下さい」と神様に求めていく時、神様を取り除いて下さる。放蕩息子の譬があります。親元を飛び出して、好き放題して、とうとうみじめな、悲惨な身分となってしまった。その時、彼は気が付いて、お父さんの所へ帰ろう。彼は意を決して、「もう息子と呼ばれる資格はありません

ん)、そうお父さんに言おうと帰って行きます。その時、父親が何を最初にしたでしょうか。帰ってくる弟を見つけて、抱き寄せて、着ているものを着替えさせるのです。我が家の息子として迎えるのにふさわしい装いをさせる。神様は今、私たちを天国の神様の所に、神の子として、神様と交わりの中に帰らせるために、今はその汚れ切った、何の役にも立たないような私たちの内なる悪しき思いを全部取り除いて、神の子としての内実を、内側を造り出そうとして下さるのです。それが訓練です。7節に「**あなたがたは訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを、子として取り扱っておられるのである**」と。子供として、神様はちゃんと受け入れて下さる。ところが、それがわからないから、神の子供でありながら、ちっとも良い事がない。次から次と、嫌な事ばかり。つぶやく人もいます。それは大きな間違いです。与えられた試練、患難、悩みがあるならば、その中でこそ、もう一度、自らを悔改めて、何が神様の前にきよめられなければならない、取り除かれなければならないものであるかをはっきりと悟らせていただく。ところが、神様から指摘されて、「いや、私は間違っていない。あの人があんなことを言うから、こうなった」と、原因や責任を周囲に擦り付けて、自分は悲劇のヒロインになって、「私は気の毒だと思うでしょう」と、同情を集めようとしています。それが間違いです。せつかく神様は、あなたを愛するゆえに、訓練を与えられる。悩み、苦しみの中を通します。鉄鉱石から鉄を取り出します。溶鉱炉で千度近い熱で燃

やします。出てきたものを精錬します。もっと純粋な鉄に造り変えるために、平炉に入れて、鉄くずなどを混ぜて鉄を強いものにする。鍛錬するのです。そのためには、高熱の窯の中で鉄を煮る。そうやって、不純物、汚れたものを取り除く。私たちは鉄鉱石のように、良い所もあれば、悪い所もある。あなたの一番美しいものを取り出すために、神様はいろいろな訓練をお与えになる。今、皆さんが訓練を受けているならば、不安や思い煩いの中に置かれるならば、主は私に心の思いを、神様に対する愛の思いが消えていないかどうか、神様は問いかけて下さいます。訓練されない子供はいないと語られています。しかも、その訓練は何のためか。10節に、「**肉親の父は、しばらくの間、自分の考えに従って訓練を与えるが、たましいの父は、わたしたちの益のため、そのきよさにあずからせるために、そうされるのである**」と。ここに「**わたしたちの益のため**」とあります。それは私たちに良い事だから、私たちが得するから、そのために訓練される。悩みの中に置かれるのです。

この一年もいろいろな訓練を神様は与えられます。ただ、それは単なる徒労に終る、むだな時間ではなくて、私たちが真剣に生きるべき時です。何を生きるか。私は何に心を向けているか。何を大事なものとしているか。私の心と思いを、もう一度、よく整え、きよめ、新しくされるためです。「**そのきよさにあずからせるため**」。神様の性質にまで、私たちを造り変えて下さる。やがてその鍛えられる者

には平安の義の実を結ばせるようになる。必ずすばらしい結果を、神様は与えて下さる。

ですから、初めに戻ります。12 節に、
「しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」。その名を信じた人々、イエス・キリストを私の救い主、購い主、私を罪から取り除いて下さった。それを具体化するために訓練しておられるのです。私たちの罪を取り除いたと宣言して下さいました。しかし、実体は、まだこの肉体をもって、この世の間は、なお繰り返し、神様のみこころを痛めるようなことしかできません。私たちが「神様、どうぞ、こんなものですが、あなたのみこころにかなうように、調理して下さい」と、まな板の上の鯉となって、自分を差し出す時、神様がきちんと料理して下さい。その料理が済むまでは、天国には行けません。神様は私たちを天国の宴会に、「ほら、見て下さい、こんなになりました」と出して下さる。その時まで、私たちの思うところ、願うところ、考えるところ、ことごとく神様のみこころなのか、神様の恵みなのか。神様はきよめ、整えて下さるのが今の時です。この時をただに悲しんで、嘆いて、どうして自分はこんな不幸な目に遭うのか。そうではなく、幸いです。喜び、喜べと、神様は私たちをそんなにまで愛して下さいているならば、主に信頼するほかありません。純粋な、きよい、光なる神の性質に、神のきよさにあずかる者となる。光は何ひとつ、陰る所がないもの、曇る

所がないものです。それと同じように、私たちを変えて下さる。この約束をしつかりと握っていきたいと思います。

ご一緒にお祈りしましょう。